

令和元年6月20日現在

機関番号：13701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21121

研究課題名(和文)20世紀前半の英国建築にみる非モダニズムの射程

研究課題名(英文)The framework of anti-modernism and non-modernism in British architectural works designed in the former half of the 20th century

研究代表者

杉山 真魚(Sugiyama, Mao)

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：70625756

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、成熟社会や非都市的集合体などに適合する芸術理論や社会理論の一端を構築することを自論んで、20世紀の芸術・文芸思潮であるモダニズムの世界観によって捨象された自然観や文明観などを「非モダニズム」の視座として仮定し、その広がりについて20世紀前半の英国建築を事例として記述することを試みた。ウィーバーの建築批評、世紀転換期の植物模様、アシュビーの芸術教育論、1920年代日本の英国建築受容、を主たる研究対象とし、都市と田園、古典主義とロマン主義、中世と近代などを対立的に扱わない思想的枠組みを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はアーツ・アンド・クラフツが生活環境それ自体、すなわち建築の立脚する人間や場所を根本的に問い直した点に着目し、社会学、経済学、宗教、文学などの知見を援用しながら記述・分析するものであり、学問横断的なアプローチであると言える。さらに本研究は、20世紀前半の英国建築を研究対象としているが、最大の関心はモダニズムの価値観において捨象されてきた自然観や文明観を再び掘り出すことにある。本研究を端緒として非都市的地域の自然と建築との関わり合いの歴史や意義、地域的特性のかけがえなさが再確認され、地域再興に関する新たな知見が得られることが期待される。

研究成果の概要(英文):What I wish to show in this study is a theory about the relationship between art and society which comports with mature society or rural community. It is possible to say that there are lots of views of nature and civilization that have been disregarded under modernism. Based on this postulate, I termed these views anti-modernism and non-modernism, and tried to describe the range of these conceptions through analyzing British buildings designed in the former half of the 20th century. Concretely, main subjects of this study were Sir Lawrence Weaver's architectural review, botanical pattern-designs at the turn of the 20th century, C.R. Ashbee's theory of art education, and the diffusion of knowledge about British architecture in the Taisho period in Japan. In this research, I carefully examined the meaning of division between the two such as city and countryside, classicism and romanticism, medieval and modern, and finally suggested the way of thinking beyond dichotomy.

研究分野：建築史・意匠

キーワード：非モダニズム アーツ・アンド・クラフツ 田園的なもの 民家 民藝 抽象化 ローレンス・ウィーバー 柳宗悦

1. 研究開始当初の背景

20 世紀の芸術や文学を研究する際、合理化、普遍原理、国際様式などの表現をともなって説明される「モダニズム」という思潮は避けて通れない。「プロト」「ネオ」「ポスト」などの接頭辞が付され、「モダニズム」以外の思潮がとりあげられることも少なくない。近年では、モダニズムが志向した「モダニティ」、あるいはその基盤としての「モダン・ライフ」、これらを好意的であれ批判的であれ再評価する研究が多岐にわたる分野において蓄積され、モダニズムが有する多義性が解体、整理されつつある。地球環境時代にモダニズムの読み直しが盛んに行われる背景には、その理論が都市化された社会とその内部での想像力を前提し、過度な国際性を志向したことへの反省がある。モダニズムが有していた大衆への眼差しや歴史主義への懐疑的態度などを評価しつつ、都市のみに依拠せず、成熟社会、スローライフ、非都市的集合体などに適合する芸術理論や社会理論を構築することが求められている。

このような問題意識のもと、モダニズムを検討する上で注目されるのが、近代建築史上、近代建築の萌芽と記述されることもあれば、近代化への抵抗と解説されることもある世紀転換期の英国建築である。近年、レサビーやアシュビーの伝記が著されたことに代表されるように、19 世紀末から 20 世紀初頭のアーツ・アンド・クラフツ運動に関与した個別の人物への関心が高まっている。一方、アーツ・アンド・クラフツの全体像に関して、現在の視点からアーツ・アンド・クラフツ運動を読み直す試みがなされている。こうしたアーツ・アンド・クラフツへの注目は、これまでの研究における誤読が関わっている。建築学の分野においては、ペヴスナーの研究に代表されるように、アーツ・アンド・クラフツの実践家が装飾や建築について言及している部分を「モダン・デザイン」の黎明として読み解き、かれらの運動をモダニズムの一部として説明することが常套的であった。しかし、アーツ・アンド・クラフツの思想や実践を再び眺めると、かれらの関心は装飾や建築に限定されていないことやモダニズムの範疇で捉えきれない価値観を提示していることに気付く。かれらは装飾芸術や建築のみならず、社会、環境、経済、宗教、文学などに関する著作を多く残しており、そこに豊かな生活環境を構築するための示唆的内容を読み込むことができる。これらに関する総合的な研究は手薄である。申請者は、アーツ・アンド・クラフツを制作と使用という人間存在の根本的事象に立ち返って記述できるのではないかという動機に基づき、「アーツ・アンド・クラフツ運動にみる非モダニズムの射程」(若手 B/建築史・意匠、美学・芸術諸学/研究課題 番号:25870640)を遂行した。ここでは、「民衆」「田園」「適合性」など世紀転換期の英国建築界における中心的概念に注目し、装飾芸術と建築とを連想し得る思想体系の一端を明らかにすることを試みた。この研究成果を踏まえ、アーツ・アンド・クラフツ運動の影響下にあったと考えられる 20 世紀前半の英国および日本の工芸論・建築論・文学論・自然論・都市論・村落論・社会論などにおける非モダニズムの諸相を整理する。

2. 研究の目的

本研究は、成熟社会や非都市的集合体などに適合する芸術理論や社会理論の一端を構築することを目論んで、20 世紀の芸術・文芸思潮であるモダニズムの世界観によって捨象された自然観や文明観などを「非モダニズム」(anti-modernism / non-modernism)の視座として仮定し、その広がりについて 20 世紀の英国建築を事例として記述することを試みるものである。

本研究の主題に掲げる「非モダニズム」とはさしあたりふたつの側面をもつものとして定義する。ひとつは、「モダニズムの否定 (anti-modernism)」としての理論・実践であり、もうひとつは「モダニズムではない (non-modernism)」理論・実践である。本研究ではこれらについて 20 世紀前半の英国建築を事例として解明することを試みる。もちろん、この時期の建築は「モダニズム」の側面をもっていることも確かであるが、これについては先行研究が多く存在するのでそれらを整理するにとどめる。「モダニズムの否定」としての側面については、20 世紀前半の思想家・実践家が、手仕事と機械生産、集合の知と科学的知識、土着性と国際性、などの対立的問題をどう認識したか、「モダニズムではない」側面については、かれらがロマン主義などの過去の思潮や生命主義などの同時代の思潮にどう反応したかを記述・分析することを通して明らかにする。本研究では、20 世紀前半の英国建築思潮に関わる著作や活動を整理した上で、報告者のこれまでの研究、日本人研究者としての立場を考慮し、以下に示す項目を主たる研究対象としながら、上記の「非モダニズム」の射程を析出する研究計画を立てた。

(1) ヴォイジーおよびマッキントッシュの思想と作品

アーツ・アンド・クラフツ運動の第 2 世代として知られる C.F.A. ヴォイジーやスコットランドの建築家 C.R. マッキントッシュは、モダニズムに漸次接近していったと考えられる。かれらの思想や作品における主題の揺らぎをかれら以前のアーツ・アンド・クラフツの思想家や実践家と比較しながら解明する。

(2) 英国建築批評家ウィーバーの論点の整理

20 世紀初頭の英国建築の展開については、(1)のように個別の建築家について精査する必要があるとともに、建築家を取り巻く批評状況についても整理しなければならない。とくに、書籍・雑誌メディアの発達とクライアントとしての中流階級の台頭・定着が急速におこった時代に、建築批評家の言表は、大きな意味をもっていたと考えられる。本研究では、雑誌 *Country Home* や *Architectural Review* などに多くの論考を残しているローレンス・ウィーバーに注目し、

かれの論点を整理しながら、英国内の動向を詳細に検討する。

(3) 蔵田周忠にみる昭和初期の日本における英国建築の受容

蔵田は英国建築をはじめ海外の近代建築の潮流をいち早く日本に紹介したことで知られる。ここで注目したいのは、英国の建築を取り上げた『近代英国田園住宅抄』において、蔵田が底本の著者の意図とは違うということを明言している点である。このことは英国と日本において、「田園」や「民家」の意味が異なることを意味していると思われる。蔵田が20世紀初頭の英国建築をどのように受容したか調査・研究し、英国の状況の独自性を複眼的に評価するとともに、日本の近代建築黎明期の思想状況の一端を明らかにする。

3. 研究の方法

研究目的に示した3つの論題についてそれぞれ言説研究を行ったのちに作品研究へ移行する。本研究では、即座に工芸作品、建築作品、都市計画そのものを工学的観点や美学的観点から判断するのではなく、作品や計画以前の思索について、建築家（思想家）の言説を読み解く方法をとる。ウィリアム・モリスの思想をひとつの軸として定め、類似点や差異の記述、概念の意味の変容などの分析を行う。その内容を踏まえ、作品研究を行い、理論と実践の一致する部分、相違する部分を抽出しながら理論の妥当性、限界、可能性等を指摘する。

4. 研究成果

平成28年度は資料の収集、20世紀前半の英国建築に関わる情報整理、英国の製造業や日英の田園に関する言説研究を中心に行った。研究成果は以下の6点にまとめられる。

(1) 研究体制の確立。

(2) 資料収集：英国へ渡航し、建築批評家ローレンス・ウィーバーと建築家エドウィン・ラッチェンスに関連する資料の収集・閲覧に重点を置いた。また、ラッチェンスの作品の現況について現地調査を実施した。

(3) 20世紀前半の英国建築に関わる思想家・実践家の整理：本研究の礎となるように、収集した図書や情報をもとに整理・分析を進めた。19世紀のアーツ・アンド・クラフツ運動やコール・サークルの面々も含めて体系化を試みた。

(4) 英国の製造業に関する言説研究：世紀転換期の動向を把握するため、研究計画当初は予定していなかったが、近代の機械生産と建築の関係を把握する上で重要であると考えられるクリストファー・ドレッサーの装飾論を解読するとともに、作品（製品）との連関を探った。

(5) 日英の田園に関する言説研究：「田園」あるいは「民家」を鍵として、1920年代までの状況を日本（蔵田周忠らの分離派、柳宗悦らの民芸運動）と英国（モリス、アシュビー、ヴォイジー、ウィーバー、ラッチェンス）それぞれについて検討した。

(6) 研究成果の公表：ドレッサーについて1編の論考にまとめるとともに、本研究の主題に掲げる「非モダニズム」の概念をめぐって日本建築学会近代建築史小委員会主催のシンポジウム「近代建築史の最先端」にて議論する機会を得た。

平成29年度は20世紀前半の英国建築に関わる情報整理、19世紀末から20世紀初頭の英国デザインの作品研究、1920年代の英国建築の日本への移入に関する研究を中心に行った。研究成果は以下の5点にまとめられる。

(1) 20世紀前半の英国建築に関わる思想家・実践家の整理：ローレンス・ウィーバー（前年度から継続）とウォルター・クレインを中心に、かれらの活動を整理するとともに、著作を読み進めた。

(2) 19世紀末から20世紀初頭の英国デザインの作品研究：前年度に引き続きクリストファー・ドレッサーとウィリアム・モリスのパターンデザインの構成原理を読み解いた。モリスの「葡萄」および「林檎」の詳細分析を試みた。また、クレインの作品研究に着手し始めた。

(3) 1920年代の英国建築の日本への移入に関する研究：分離派建築会のメンバーに見られる「田園的なもの」への志向性と英国建築の関わりを検討した。主に瀧澤真弓設計の日本農民美術研究所の設計経緯について山本鼎および柳宗悦との関わりとともに調査した。

(4) 1920年代に展開された民芸運動の思想面に関する研究：柳宗悦と英国の関係を中心に、自然の模様化の問題について分析した。柳の説く「用美不二」および「静動一如」という考え方に着目し、英国のウィリアム・ブレイクの思想やモリスの作品との連関を探りながら、「抽象化の程度」という日英の建築および装飾を対照する際の観点を見出した。

(5) 研究成果の公表：柳宗悦の自然観に関するもの、モリスの作品分析に関するもの、計2編の論考にまとめた。

平成30年度は、昨年度に引き続き、1920年代の英国建築の日本への移入に関する研究および民芸運動の思想面に関する研究を実施するとともに、これまで個別的に発表してきた論考を横断する「非モダニズム」の視点を総括した。研究成果は大きく以下の4点にまとめられる。

(1) 1920年代の英国建築の日本への移入に関する研究：分離派建築会と建築における「田園的なもの」の関係を探った。蔵田周忠の『近代英国田園住宅抄』および堀口捨己の「建築の非都市的なもの」で「クロイドの藁葺の家」が取り上げられる意味を探った。

(2) 1920年代に展開された民芸運動の思想面に関する研究：分離派建築会と民芸運動の関わり

りについて当時の田園関連著作、大礼博における「民藝館」に対する分離派メンバーの反応、および瀧澤眞弓設計の「日本農民美術研究所」に対する柳宗悦の反応を整理した。

(3) 世紀転換期英国における「建築」概念の再考：昨年度末に本年度の課題と考えていたクレインの思想と作品の解明を進める中で改めて建築と教育の関わりを捉え直す必要性が出てきたため、当時芸術教育論を多数発表していたアシュビーの建築観を記述分析した。クレインについての研究は課題として残った。

(4) 「非モダニズム」についての総括：独仏語圏文化学研究会シンポジウム「世紀転換期の装飾と「近代性」をめぐる問題 ヨーロッパ文化論の視座から」において成果を公表する機会を得て、モリスからアシュビー、ヴォイジーへの展開を整理・発表した。

以下、主たる研究成果の概要を記す。

(1) クリストファー・ドレッサーの壁面装飾について：コール・サークルの系譜を引き、モリスと生年を同じくするドレッサーの思想と作品の特質について以下の点を明らかにした。ドレッサーは構成および色彩の追究を通じた英国性の創出を壁面装飾の主題とし、自然の抽象化を装飾の方法論とした。具体的手法としては、植物に共通する構造を解明しながら幾何学的図案を創出した(花の幾何学的構造を重視し無味乾燥とした図案名を付す)。かれは観察から制作まで一貫して科学的に思考していると言える。また、パタンの発明はドレッサーの名で行うが、それ以降のパタン 使用物(商品)という生産過程は他者に委ねていると考えられる。生産を担当するのが個人が製造業者(機械)かという倫理的問題は関心の埒外なのである。

(2) 柳宗悦の模様論 モリスの壁紙に対する批判の根拠：柳がモリスの自邸「赤い家」についてデザインの側面についても厳しく批判している点に注目し、日本における西洋のデザイン受容の一断片として検討した。モリスの壁紙に見られる繰り返し模様はあくまでも秩序に基づく「静」の表現であると言えるが、柳は日本と英国では抽象化表現の程度に差があることを問うていない。また、モリスは自身の関心に応じて日常的な自然環境も模様のモチーフとしたが、柳は日本の笹紋に代表される個人を超えて共有されてきた伝統的図案に強い意義を認めている。モリスのパタンデザインにもアカンサスをはじめ、葡萄や蔓草などの歴史的文様も数多く適用されているが、これらが日常的な動植物と融合されることは柳からすれば不純であったと考えられる。

(3) 自然と模様について 柳宗悦と英国の関係をめぐって：柳宗悦の自然観と民藝論を英国のウィリアム・ブレイクの思想やモリスの作品を手がかりとして整理することを試みた。「無」「用美不二」「自然さ」「静動一如」などの言葉を析出した。柳はブレイクの思想と禅の思想を融合して、直観によって不可知な自然に至るという考え方を確立した。これと表裏一体を為すのが象徴的表現であり、とりわけ民藝における模様化が柳の考察対象となった。模様「型」の問題は個々のデザインを超えて、社会の連帯という、より広範な内容を含んでおり、公共性を考える視点を我々に提供してくれる。

(4) チャールズ・ロバート・アシュビーの芸術教育論と建築：アシュビーの芸術教育論における建築および建築家に関する記述を整理・分析した。アシュビーには諸美術と諸工芸の統合を前提とする建築がそれらを悪化させているという認識があった。芸術教育の提唱は「母なる芸術」としての建築の復権に向けられていたと言ってもよい。そして建築家の教育が重要な意味を持っていた。それは単なる建築の知識や技能に関する教育ではない。建築家をいわば全人として育成する方法が検討されていた。また、アシュビーが完全に前近代的世界観を放棄するのではなく、中世の組織である工芸ギルドのシステムを援用し、職人技術や工房を近代生活に不可欠な要素と見ている点を見落としてはならない。この架橋の視点こそアーツ・アンド・クラフツ運動におけるアシュビーの独自性であると考えられる。

(5) 分離派建築会と建築における「田園的なもの」：分離派100年研究会の第4回シンポジウムの幹事として企画した。概要は次の通り。分離派建築会が発足された当時、社会にはデモクラシーの潮流が現れたり、ロシア革命に後押しされて社会主義思想が隆盛をみたりするなど、「大衆」や「民衆」に即した種々の主義や主張が生まれた。社会や精神の「改造」が叫ばれ、人々の眼差しは新しい都会・都市と伝統的な田舎・地方の両者に向けられた。本シンポジウムでは、分離派建築会のメンバーが新しい創作を標榜しつつも、堀口捨己の「紫烟荘」、瀧澤眞弓の「日本農民美術研究所」、蔵田周忠の一連の田園住宅など、民家(農家)に着想を得たと考えられる作品を残していることに注目した。「田園的なもの」「地方的なもの」がかれらの建築制作のモチーフに数えられたのは、刻々と変化する日常生活に対するひとつの応答であり、そこには表層的な模倣を超えた意味があったと考えられる。近代建築の多様化と均質化の中でかれらが摂取した地方性の問題について、分離派建築会の活動と同時期に創始された民藝(=民衆的工芸)運動も視野に入れながら検討した。杉山は主題解説を兼ねて、「田園」をめぐる思想の見取り図について発表した。分離派建築会会員による「田園」に関わる言説や作品を辿ると、都市およびその郊外に建てられる文化住宅との関わりの中で「田園」が主題化され、そこには非都市的思考、反都市的思考、都市的思考という3つのパラダイムが存在していたことが見えてくること、いずれも建築家の個性を抑制的に扱いながら材料や民衆のもつ自然さや素朴さを創作に取り込むという共通の姿勢を有していること、を指摘した。

本研究と既往研究「アーツ・アンド・クラフツ運動にみる非モダニズムの射程」とによって得られた「非モダニズム」に関わる主要な鍵語を整理すれば次のようになる。

	モダニズム		非モダニズム	
	モダニズム	モダニズムの否定 (anti-modernism)	モダニズムではない (non-modernism)	
自然の抽象化	convention 様式化・便化 (ドレッサー、科学、量産)		自身のコンベンション (モリス、芸術、一回性)	翻案と配置 (ピュージン、 中世主義) 古典的伝統 (ドレッサー、 モリス) 静動一如・型 (柳)
美の基準	実践的機能 への適合 (レサビー) 物質的適合 (ヴォイジー)	fitness 適合している仕事 (モリス) 用美不二 (柳)		構想的機能への適合 (ラスキン、テオリア) 道徳的適合 (性格) (ヴォイジー)
量 / 質	standard 機械産業 標準化と標準 (コール、レサビー) (アシュビー)		手仕事の方法 (モリス)	工房の再構築 (TO 図) (アシュビー) ゴシックの精神 (モリス、柳)
生活 / 生命	life 近代生活 より大きな生命 (ドレッサー、レサビー) (アシュビー)		人間の完全な 生命 (ラスキン) 慎みある生活 (モリス)	有機的生命 (コブデン=サンダーソン) ひとつの喜び (モリス)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

- (1) 「チャールズ・ロバート・アシュビーの芸術教育論と建築」
杉山真魚, 日本建築学会 2019 年度大会学術講演梗概集 (北陸), F-2 建築歴史・意匠, 印刷中, 2019, 査読無
- (2) 「柳宗悦の模様論 モリスの壁紙に対する批判の根拠」
杉山真魚, 日本建築学会 2018 年度大会学術講演梗概集 (東北), F-2 建築歴史・意匠, pp. 271-272, 2018, 査読無
- (3) 「クリストファー・ドレッサーの壁面装飾について」
杉山真魚, 日本建築学会 2017 年度大会学術講演梗概集 (中国), F-2 建築歴史・意匠, pp. 807-808, 2017, 査読無
- (4) 「連載 ウィリアム・モリスを再読する 歴史を継承する方法」
杉山真魚, 『近代建築』2016 年 8 月号, pp. 34-37, 2016, 査読無

〔学会発表〕(計11件)

- (1) 「アーツ・アンド・クラフツの思想：モリスの歴史観と近代性の関係を中心に」
杉山真魚, 独仏語圏文化学研究会シンポジウム「世紀転換期の装飾と「近代性」をめぐる問題 ヨーロッパ文化論の視座から」大阪市立大学杉本キャンパス, 2019 年 3 月 24 日 (依頼あり)
- (2) 「カルチュラル・グリーンへのアプローチ」
杉山真魚, カルチュラル・グリーン研究会, イーグレ姫路 4 階セミナー室 B, 2018 年 12 月 22 日
- (3) 「建築論とは何か」
杉山真魚, 建築論研究会, 京都大学吉田キャンパス総合 9 号館 W404 室, 2018 年 10 月 7 日
- (4) 「柳宗悦の模様論 モリスの壁紙に対する批判の根拠」
杉山真魚, 日本建築学会 2018 年度大会学術講演 (東北), 2018 年 9 月 6 日
- (5) 「「田園」をめぐる思想の見取り図」
杉山真魚, 連続シンポジウム「分離派建築会誕生 100 年を考える」第 4 回, 京都大学楽友会館 2 階会議・講演室, 2018 年 6 月 16 日
- (6) 「「静動一如」の自然観 民藝の思想と 19 世紀末英国」
杉山真魚, イギリス・ガーデン研究会, 高知県立大学文化学部永国寺キャンパス教育研究棟 A106 教室, 2017 年 12 月 2 日
- (7) 「日本の美意識と建築論 美と用の問い：民藝・民家の視点から」
杉山真魚, 日本建築学会北陸支部福井支所・建築論フォーラム, アオッサ 601-A 研修室, 2017 年 10 月 14 日 (依頼あり)
- (8) 「クリストファー・ドレッサーの壁面装飾について」
杉山真魚, 日本建築学会 2017 年度大会学術講演 (中国), 2017 年 9 月 1 日
- (9) 「アーツ・アンド・クラフツ運動にみる非モダニズムの諸相」
杉山真魚, 日本建築学会建築歴史・意匠委員会近代建築史小委員会, 建築会館 308 会議室, 2017 年 3 月 7 日 (依頼あり)

- (10) 「ウィリアム・モリス自邸「赤い家」の受容について 柳宗悦の場合」
杉山真魚, 日本建築学会 2016 年度大会学術講演(九州), 2016 年 8 月 24 日
- (11) 「日本におけるウィリアム・モリスの受容について 大正期を中心に」
杉山真魚, 日本建築学会近畿支部研究発表会, 2016 年 6 月 26 日

〔図書〕(計 1 件)

- (1) 『ガーデン研究会ジャーナル 4』, ブックウェイ, 2018 ISBN: 978-4-86584-285-2
共著, 杉山担当箇所: pp.37-46, 「自然と模様について 柳宗悦と英国の関係をめぐって」

〔その他〕

- (1) 学会発表(6) 配布資料(全 71 頁): 「分離派建築会と建築における『田園的なもの』」
杉山執筆論考: pp.4-12 「『田園』をめぐる思想の見取り図」,
資料: p.13 「田園関連著作(抄)」, 資料: pp.14-17 「分離派建築会と民藝」
- (2) 図書(1) WEB 版: http://gardenjournal.jp/wp-content/uploads/2017/01/sugiyama2019_01.pdf

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。